

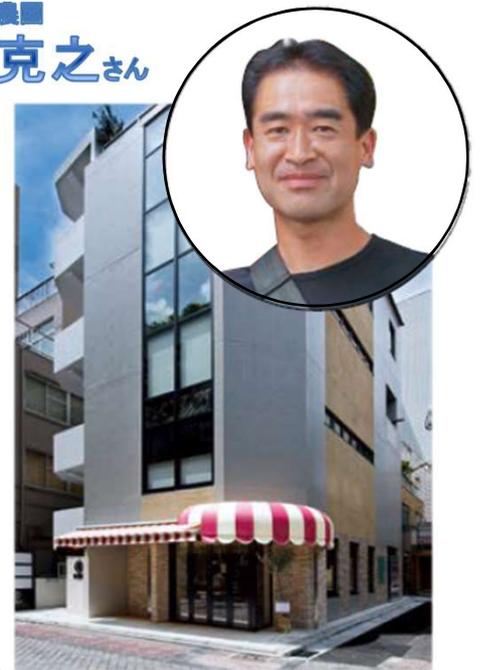
ECO-FRIENDLY INTERVIEW No. 2

ワタミエナジーの「再エネ100プラン」の初導入の施設「東京農村」のオーナーである、国分寺中村農園の中村克之さんにお話しを伺いました。

「東京農村」は「東京の農業を応援する」をコンセプトにした東京赤坂にある商業施設。施設内には、東京産の野菜や肉・ドリンクなどを提供する飲食店、東京の農・食を支援するシェアオフィス、シェアキッチンといった東京の農業が体感できるコミュニティ施設です。

農業とエネルギーを通して 「誰も取り残さない街」をつくりたい

東京農村 オーナー
国分寺中村農園
中村 克之さん



東京赤坂にある
商業施設「東京農村」

—なぜ「東京農村」を設立されたのですか？

10年前に脱サラをして、農業をはじめました。しばらくしてから我々農業者が消費者へアピールしていこうという意識が足りないなと感じるようになりました。東京の農業の発信力はあまり強くない。だから、行政が作った施設や建物ではなく、自分たちのやりたいように自分たちの農業をアピールする場を作りたい、

“農家が一步踏み出せる場”というコンセプトで「東京農村」を作りました。東京の真ん中の赤坂で自分たちの野菜を食べてもらおうよ、とまずは国分寺・国立から仲間を募り、今ではたくさんの東京の農家さんが参加してくれています。また、月1回開催している農家とベンチャー、農業に興味のある方たちの交流の場である「東京農サロン」でたくさんの繋がりやアイデアが生まれて、“農家が一步踏み出せる場”から、“農業の可能性を広げる場”へと育ててもらっているなと感じています。

—ワタミエナジーの「再エネ100プラン」にかえたきっかけを教えてください

以前は特に電気のことには気にしていなかったし、再エネなどへの意識は特にありませんでした。「東京農サロン」にワタミエナジーの本多さんが参加してくれたことがきっかけで電気のことを意識しました。本多さんの農業やエネルギーに対する思いなどを聞いて、ワタミの「再生可能エネルギーを増やすでんき」というのが東京農村のコンセプトに一致しているなと思いワタミエナジーのでんきに切り替えました。都市農業は施設栽培も増えている中で、灯油を燃やして暖房をかけるのではなく、

ECO-FRIENDLY INTERVIEW No. 2

自然由来のエネルギーで行うなど循環型にしていくことを僕らが一番に考えなければいけないと思っています。

—これから取り組みたいことはありますか？

農家としてやりたいと思っているのは、体験農園のような事業。ただ直売所で野菜を買ってもらうのではなく、体験も含めて買ってもらうというイメージです。どうやって野菜ができていって普段みなさん意識をしていないじゃないですか。例えば「大根欲しい！」って言われたら、「じゃあ、そこに取りに行きましょう！」っていうような、収穫体験含めて買ってもらうような事業をしたら面白いのではと前から考えていました。野菜の種類や旬を知ったり、どうやって作られているのか、どうやって生えているのかを身近な所で知るのは、都市農業でしかできない、消費者に近い所にいるからこそできる事業を試みたいのです。

—都市農業の役割として、意識していることはありますか？

2015年に都市農業振興基本法というのができて、もともと市街地に農地はいらないうえに国が、東京などの市街地にも農業が必要だし農地も必要だと認めたのです。その農地自体に都市に必要な機能があるからだとすることで都市農業の必要性が法整備されたのは東京の農業にとってとても良いことだと感じています。農地には、5つの機能があって、①レクリエーション・コミュニティ機能、②教育機能、③防災機能、④環境保全機能、⑤景観形成・歴史・文化の伝承機能。その機能を我々生産者は託されたのだということ意識して、ただ野菜を作るだけではなくて、地域の人たちと農地を守っていくのだということ意識していますし、そういう活動を積極的にしていきたいと考えています。先日まで、都青協(東京都のJAの青壮年部)の副委員長をさせてもらっており、昨年都青協主催で東京の農産物を集めて、生活困窮者の方やひとり親世帯の方に食べてもらおうというイベントをフードバンクさんなどと共同で行いました。そこで衝撃を受けたのが、自分たちのすぐ近くに、毎日ご飯を食べられていない子がいたり、しばらく水だけすごしていたという子がいたり、そんな子たちがこんなに近くにいたことに今まで気づきもしなかったことです。その子たちに、僕らの野菜がわたって、「こんなに立派なトマトを見たのは初めて」と言ってもらい、この子たちを僕ら生産者が一緒に育てていかなければならないととても強く感じました。街をつくるのに、こうした「社会包摂」が農家の一つの役割だと強く思いました。

ECO-FRIENDLY INTERVIEW No. 2

—「社会包摂」とは具体的にどういうことでしょうか？

5年続けている国分寺の野菜を国分寺のレストランで使ってもらおうという地産地消の取り組み「こくベジプロジェクト」から、「こくベジエネルギー」という地域電力の構想を考えています。農家の野菜の栽培ゴミと、飲食店の生ゴミを原料に、バイオマスガス発電を行い、その電気を農家や飲食店で使用するという循環モデルを構築したいと考えています。国分寺の地域電力をつくって、地域の中でエネルギーの循環を行い、そこから出た利益で生活困窮者への支援を行ったり、「誰も取り残さない街」をつくりたいですね。そういったことが「社会包摂」につながると考えています。

昔の日本は隣近所でお醤油を貸し合ったり、互助の精神みたいなものが元々強かったと思うのです。それが現代ではどんどん疎遠になって互助ができない社会になってきてしまっていると感じるので、そこに立ち返って、日本の本当の良さを取り戻せたらなと思ったりしています。

コロナウィルスや自然災害など、何があるかわからない時代だからこそ、農家こそが地域の中でお互いが手を差し伸べ合える地域のハブになりたいと思っています。

